

ヒュームとオーヴァーストーン：1840年の攻防

著者	竹内 洋
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	50
ページ	11-23
発行年	2016-01-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000465/



ヒュームとオーヴァーストーン ― 1840年の攻防 ―

*竹 内 洋

Hume and Overstone: dispute in 1840

TAKEUCHI Hiroshi

Abstract

In my last paper I have discussed on Tooke's criticism in his *History* on Joseph Hume's view on money and circulation. In Hume's view deposit was the real part of circulation. In this paper I have looked into the dispute between Hume and Overstone in the Committee on Banks of Issue in 1840 to find how Overstone explained the difference and relation between deposit and money. Overstone tried from the theoretical point of view to say how deposit is different from money. According to him, and different from Hume, deposit is not the money but the mode which performs a part of the function of paying or discharging debts under some conditions.

Key words : Joseph Hume, Overstone, Currency Principle

1. 問題視角

19世紀イギリスの通貨論争において対立の一方を成した通貨学派の三人の中心人物の一人であったトレنز (Torrens, Robert, 1780-1864) は、その1837年の著作 *A Letter to The Right Honourable Viscount Melbourne* (Torrens, 1837a,b) によって同学派の一員として一応認知されたのであったが (竹内, 2013, 37ページ), それから二十年を経過した1857年にはその著作 *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Bill of 1844 Explained, and Defended* (第1版1848年, 第2版1857年, Torrens, 1848, 1857) の予定された第2版の内容により, 彼らのリーダーであったオーヴァーストーン卿 (Overstone, Lord, 1796-

1883. 1849年まではSamuel Jones Loyd¹⁾. 以下においては基本的にオーヴァーストーン (Overstone) と記す.) による批判を被ることになったのであった. その批判の背景に預金の問題があったこと, すなわちトレنزが預金をもって単純に通貨の一部を成すものと考えていたことがあったことはすでに見た (竹内, 前掲論文, 38ページ).

その際にオーヴァーストーンがトレنزに送った書簡の内容は文面から見て非常な怒りに満ちたものであった. そのトレنزに対する批判が怒りを含んだものになったのは, トレンズの予定された主張がトゥック (Tooke, Thomas, 1774-1858) を利するものであったこともさることながら, その以前に1840年発券銀行委員会でのヒューム (Hume, Joseph, 1777-1855) との論争の記憶があったのであろう. そこでの

* 宮城教育大学社会科教育講座

1) 通知は1850年2月28日付であったから, 正式には1850年2月までとすべきであるが, ここでは便宜上1849年までとした. (*The London Gazette*, No. 21073, p. 653.)

ヒュームの質問は大量かつ執拗なもので、その故にか、ヒュームの言い方によれば、オーヴァストーンは最終的には証言席を去って二度と戻って来なかったのであった。その心労が相当なものであったことはオーヴァストーン自身によっても語られたところであった。（竹内、前掲論文、38-9ページ）

そのヒュームの貨幣把握については先に、トゥックによる批評に依りつつ、その1839年の著作 *On the Bank of England; and the State of the Currency* (Hume, 1839) の内容に即して検討したところである。それによれば、正にヒュームは預金を通貨の一部と成す立場からイングランド銀行の政策を批判していたのであった。（拙稿、2013）だからこそ、オーヴァストーンから見れば、自分を学派のリーダーと仰ぐトレنزが預金をもって通貨の一部を成すものと主張することは到底受け容れることのできないことだったのである。

しかしながら、この時点で、この問題についてオーヴァストーン自身はどう考えていたかについては、前稿においては十分にこれを検討することはできなかった。本稿は、この預金と通貨との関係についてオーヴァストーン自身がどう考えていたかを、他ならぬヒュームとの直接の対峙の場面において、そこでヒュームが提出した論点に対するオーヴァストーンの回答の内容において、把握しようとするものである。

その場面とは上にも見た1840年の発券銀行委員会 (The Select Committee appointed to inquire into the effects produced on the Circulation of the Country by the various Banking Establishments issuing Notes payable on demand) であった。同委員会において、オーヴァストーンは7月17, 21, 22, 23, 24, 31の各日に証言し、その中でも23, 24および31の三日間にヒュームの執拗な質問にさらされたのであった²⁾。

また、オーヴァストーンは、これに加えて、同年9月16日から11月10日にかけて *Morning Chronicle* 紙に上記委員会での自らの証言の補足記事を四回に

わたって寄せていることも知られていることである (O'Brien, 1970, Vol. I, p. 26.)。これらについても、その寄稿の経緯から、ヒュームとの直接対峙の延長線上にあるものと考えてよいだろう。

他方、これらに先立つ1837~1840年は「パンフレットの書き手」 (O'Brien, 1970, Vol. I, p. 93.) としてのオーヴァストーンの多産の時期であり、*Reflections suggested by a Perusal of Mr. J. Horsley Palmer's Pamphlet on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market* (Overstone, 1837a) から *Thoughts on the Separation of the Departments of the Bank of England* (Overstone, 1840d) に至る六つの著作 (Overstone, 1837a, b, 1840a, b, c, d) が次々と著されたが、これらのうち前の二点は何れも1837年の著作であり、それらはヒュームとの直接対峙に三年先行するものであった。また、後の四点について見ても、それらは何れも1840年内の刊行であったが、それらの執筆の完了は、最初の *Remarks* が1月、次の *Letter to J. B. Smith* および *Second Letter to J. B. Smith* がともに2月6日、最後の *Thoughts* が4月2日であったから、それらも上記委員会証言に数か月先立つものであった³⁾。

そこで、預金に関する同時期におけるオーヴァストーンの思想の全体像についてはこれらの諸著作の内容の検討を俟つべきものであるとしても、本稿の課題からすれば、ここではヒュームとの対峙の内容に直接かわるものとして同委員会証言とその後の新聞記事に、その中でも同委員会での証言を対象を限定するのが妥当であろう。本稿は、以上の限定のもとに、預金と通貨との関係をめぐるオーヴァストーンの把握を探り、そのことを通じていわゆる通貨主義の貨幣把握におけるオーヴァストーンとトレنزとの不協和音の本質把握への展望を開こうとするものである。

2) House of Commons, 1840, pp. 211-95, 316-37 (qq. 2651-3265, 3465-614.)。これらのうち証言番号3465~3614が7月31日一日の分であった。拙稿 (2013), 39ページ。

3) O'Brien (1970), Vol. I, pp. 23-4参照。執筆完了時期については、何れも序文あるいは巻末にその日付が記載されている。最初のものは序文といってもミルトンとリカードウからのそれぞれごく短い引用があるだけである。最後のものについてはその日付が1844年7月となっているが、私家版が1840年4月になるものであった。その点についても上記O'Brien (1970) を参照。

II. 預金と通貨の理論問題 — 7月23日および24日の質疑から —

1840年発券銀行委員会は、同年3月、要求払い銀行券を発券する銀行業者によって国内通貨に及ぼされる諸影響を調査するために英国下院に設置され（House of Commons, 1840, p. v.），同年4月から8月初旬までに9名の証人を喚問して、8月に報告書を出した。その間オーヴァーストーンに対する喚問は同年7月17日から同31日までに計6日あり、その中の23、24および31の各日にヒュームによる質問が集中した。具体的には23日が55問、24日が112問、最後の31日が148問であり、しかも23日においては質問第3092号以下のすべてが、24、31日の両日についても委員長が発した数問以外のすべてがヒュームによるものであった（拙稿、2013、39ページ）。つまり、同委員会におけるオーヴァーストーンの証言のうち第3092号から最後の第3614号までの間に数えられる計300回を超える証言はすべてヒュームの質問に対して答えたものであった⁴⁾。それ故、ヒュームとオーヴァーストーンとの対立はこの三日間においてほぼ尽くされていると見てよいだろう。

そこで次に必要となるのは、ヒュームの質問内容に即して、オーヴァーストーンに対して投げかけられた論点とそれに対するオーヴァーストーンの回答とをできる限り分類整理することであろう。以下、本節IIとIIIにおいてそれらを三日間の日付毎に概要整理してみた。

(a) 7月23日

7月23日の証言は第3092号から第3146号まで55号に及ぶ。ヒュームの質問は初めから預金と通貨との間に違いがあるか否かの点に集中している。一方、この問いに対するオーヴァーストーンの見解は証言第3109号において詳細なものとなっている。

その具体的内容をオーヴァーストーンは次のように述べている。

「預金業務（deposit business）は通貨（circulation）

の使用を節約する方法（mode）の一つである。（中略）それはより大きな負債や取引額をさもなければ発生し得た額より小さな額の流通手段（circulating medium）によって精算（adjust）することによる。（中略）この方法によって準備金（reserve）は一定額の業務を、銀行預金業務という過程がもしなかったとしたら実現するための全預金に等しい通貨（circulation）額を必要としたであろう業務の額を、実現（perform）することができるのである。（中略）だが、通貨（circulation）の節約による利用ということは通貨（circulation）そのものではない。私の手元の金庫にある銀行券とイングランド銀行に私が預金した銀行券とは同等に私の自由になるものかとあなたが聞く場合、そうであることに疑いはないが、私がイングランド銀行の中に持っている銀行券については、それが真実であるのは、私と同様の事情のもとにある全員が同時に行動を起こさないという仮定のもとにおいてのことに過ぎない。

（中略）預金を通貨（circulation）と呼ぶことは成し遂げられた業務の額をそれによって成し遂げられた用具と取り違えるという誤謬である。」（House of Commons, 1840, 証言第3109号）

ここに言われる「それによって成し遂げられた用具」とはここでは預金のこと、「成し遂げられた業務」は「負債や取引額の精算」のことである。そして、これらの前者が通貨使用の節約によって後者の業務を成し遂げるのだから、前者すなわち預金の準備金は後者すなわち本来なら必要であったであろう通貨の額より量的に小さいのだ、というわけである。その限りにおいて、預金を通貨（circulation）に含ませることは概念としてできないことであるとともに、両者はここに見た意味合いにおいて量的にも上のように不一致となるということであった。

これに続くヒュームの質問は預金はその性質、機能において貨幣一般と同じものか否かという点に向けられている。その際の主な論点は、具体的には、第一に預金は手元現金と同様にその所有者の自由になるものかということ（証言第3110号）、第二に預金は負債

4) その間にノーマンとトゥックの喚問があり、その証言数が200ほどであった。

として銀行券と同じものかということ（証言第3119～3128号）、第三に預金は価値尺度、価値の本位および負債の解消という貨幣が果たす諸機能をすべて持つかということ（証言第3129号）、以上である。これら三つの問いに対する答が肯定的であれば、預金と通貨との区別はないだろうということである。

そこでそれらに対するオーヴァーストーンの回答を見ると、その回答は何れの問いに対しても否定的なものであった。その理由は、具体的には、第一の点については預金保有者の全員が同時にその権利を行使することは不可能だからであり、第二の点については銀行券は鋳貨に対する負債である点で預金と同一ではないからであった。また、第三の点については、預金は負債を解消する手段であるとしても、それは貨幣一般とは相違して価値尺度でも本位でもないと答えている（証言第3132号）。

したがって、ここでのオーヴァーストーンの回答の要点は次のようになるだろう。すなわち、預金は、これを預金業務として見ればそれは貨幣が負債解消というその一機能をそれを通じて果たす手段であるに過ぎないということ、またこれを銀行の金庫に保管されている準備金として見ればその額は流通において必要とされる通貨の総額より少ないということ、以上であり、したがって預金を通貨あるいは貨幣と同一のものと看做すことはできないということであった。

(b) 7月24日

翌7月24日の議論は上に見た諸論点についての攻防の継続である。そこでの質問と回答についても順を追って整理してみることにしよう。この日の証言総数114件のうち議長のウォーバートン（Warburton, Henry, 1785-1858）によるもの2回を除くすべてがヒュームによるものであったが、その全容は、ヒュームのねらいが預金と貨幣とは同一であると認めさせることであったことから、概ね次の二つに整理することができるだろう。

第一に預金と貨幣とのそれぞれが負債の解消において果たす役割についての質疑、第二には、イングランド銀行の勘定に着目し、預金と銀行券とは何れの形態で存在しようとするイングランド銀行の債務としては同じであることから、預金と貨幣との関係に迫ろう

としてなされた質疑である。そこで、以下、この順に沿って質問と証言の内容に分け入ってみることにしよう。

第一の点について、ヒュームはまず同日の第二番目の質問第3148号において預金と貨幣とは同一かと単刀直入に問うが、オーヴァーストーンの回答は端的に否というものであった。だが、ヒュームはそれで引きさがることをせず、そこから、預金が預金者によって使用される具体的なケースに立ち入っていく。その結果、次のような質疑が続けられることになった。

「イングランド銀行における預金はそのどの部分も貨幣だと思うか？—— 思わない。」（証言第3148号）

「20,000ポンドのソヴリン貨は20,000ポンドの手形に支払うべき債務を預金がなし得る以上に完全に履行し得るのか？—— 当事者双方が一つの預金銀行にそれぞれ口座を持っている場合には、一方の側から他方の資産（credit）への資産の移転は一定の債務をソヴリン貨が履行するであろうと同様同程度に確実に履行することができる。」（同第3150号）

これを受け、ヒュームによる問いかけに始まる次のような質疑が続いた。

「'deposits' という用語と 'credit' という用語とを同じ意味のものとして使っているか？—— それらは非常に大きな程度において同義だ。（後略）」（証言第3160号）

「イングランド銀行において預金と債権（credit）との間にどのような相違があるか説明できるか？—— そこには相違があるとは私は言わない。」（同第3161号）

この質疑に出てくる 'credit' という語は、当時の用語法から見ても、「資産」あるいは「債権」という意味であろう⁵⁾。そして、イングランド銀行の顧客はイングランド銀行券を持っているかまたは同行に預金を持っているか何れにしてもそれらの何れによっても債務を履行することができるであろう。このことから、ヒュームは預金と銀行券とは通貨（circulation）と

して同じものなのだよと言おうとしているように見える。

次の一連の質疑はこの問題をめぐる両者の攻防の場面である。

「これまでの質問に対する回答の中で、預金は債務の解消においては貨幣の性質を持つと認めなかったか？——私が認めたのは預金は一定の条件のもとで一定の債務を解消するために使用され得るということだけだったと信ずる。」（証言第3181号）

「イングランド銀行のあなたに属する預金は何であれ債務の解消に充当されることを、あなたが同行に対して支払いを指図することが適当だと考える場合にも、なお妨げる何らかの事情があるか？——ある。」（同第3182号）

「それらとは何か？——その者がその支払い指図書を受け取るのを拒否する場合である。」（同第3183号）

「それらはあなたが負っていた債務を解消しなかったのか？——そうだ。ただし銀行券がしなかったのではない、預金がしなかったのだ。」（同第3186号）

「あなたはあなたが同行に保有する預金の額だけの銀行券を取得したのではないのか？——私は私の債権（credit）の解消分を銀行券として取得した。」（同第3187号）

「その債権（credit）とは預金と同義か？——この場合、その債権（credit）は預金と同義である。」（同第3188号）

「その債権（credit）は銀行券と同等にその債務を解消したのではないのか？——否、債務を解消したのは銀行券であって債権（credit）ではない。」（同第3189号）⁵⁾

以上の質疑においてヒュームとオーヴァーストーン

とは、両者ともに預金も銀行券も債権（credit）としては同義と見なしていた点で同一であった一方で、なおオーヴァーストーンは二つのものの間に違いのあることを認めていた点でヒュームと対立していたということができよう。そのことを端的に示すのが次の証言である。

「我が国の貨幣（money）に備わっている普遍的交換能力という力を預金は持たないというのがあなたの見解なのか？——貨幣が持っている無限の連鎖における普遍の交換可能性の性質を預金は持たないというのが私の見解だ。」（証言第3192号）

この時点において、預金と銀行券とは、債権（credit）としては同一であったとしても、なお同一でない理由をオーヴァーストーンは二点挙げたことになるだろう。その第一は上記証言第3109号に見られた。すなわち預金者全員がその預金に対する権利を同時に執行した場合にはそれは貨幣として十全に機能することができないということである。また、その第二は上記第3181～3183、3186～3189号の一連の証言の中に見られた。すなわち、債権者債務者の双方がともにイングランド銀行に預金を持っていたとしても、両者のうちの債権者が債務者のイングランド銀行に対する支払い指図書を受け入れなかった場合にはそれは貨幣としての機能を果たし得ないということである。

ここに見られる対立において、ヒュームは預金と貨幣とは同一と考えているのに対して、オーヴァーストーンは預金を貨幣の範疇に属するものと一応看做したうえで、前者は後者に比較してその貨幣性において劣るものとしている点でヒュームと異なっているに過ぎないように見えるかも知れない。この点については、一連の質疑内容をここまで追跡してきた時点では、次に見るこの日の開始の質疑がオーヴァーストーンの立場を示唆しているように思われる。

5) 'credit' はMortimerの『商業辞典』では「商業においては商品あるいは貨幣の信用または貸付（loan）」（Mortimer, 1823, p. 246.）。またマカロックの『商業辞典』でも「一方の者が他方の者に貨幣あるいは他の財貨を貸付（loan）によって、すなわちその即時の支払いを約定条件として要求することなくして、譲渡する」（McCulloch, 1846, p. 443.）場合のものと説明されている。

6) 以上の第3181～3183、3186～3189号の質問と証言については、要点を明確にする観点から、抄訳するにとどめた場合がある。以下についても同じ。

「およそ預金は貨幣の質をある低い度合いで持っているのだと証人の一人が言ったが、この意見に同意するか？——私は自分の意見は自分の言葉で述べるだろう。貨幣の質をある低い度合いで持っているということによって何が意味され得るのかについては、実際のところ私にはわからない。」（証言第3147号）

この証言内容から見て、オーヴァストーンは預金と貨幣とは本質的に相異なるものだと考えている点でヒュームと対立していたと思われる。次の攻防はこの点に関するオーヴァストーンの見解を24日の時点で示したものであろう。

その場面はそれぞれ証言第3221、3229号に始まる。具体的には、一つは銀行による有価証券購入によって市中に銀行券が払い出される場合、もう一つは銀行保有の有価証券の売却によって市中銀行券が銀行に回収される場合で、前者の場合には、払い出された銀行券が再び預金されることにより流通通貨（circulation）の量は不変となる。また、後者の場合には有価証券購入者はその購入に先立って購入額相当分の預金を引き出しており、それが銀行に還流するため、やはり同じく流通通貨（circulation）の量は不変となる。

この質疑を受け、預金と貨幣との性質についてオーヴァストーンが理論的に答えたのが次の質疑である。

「イングランド銀行が有価証券を売却して銀行券を回収する場合には貨幣数量が縮減されると言ったか？——そうだ。」（証言第3237号）

「その回収される銀行券額は預金と流通通貨（circulation）とのどちらからでも取得され得るのか？——その質問に満足のいくように答えるためには銀行業務の本質について考察することが必要だ。預金とは諸債務に対して銀行側に発生する支払い義務であり、それに備えて銀行は一定額の銀行券や鋳貨を保有しているし、一定額の有価証券をも保有しているのである。預金は疑いもなくそれがある全額について銀行から引き出し可能である、そして、引き出しがあった場合、その銀行業務を適切な秩序と均衡とにおいて維持するた

めに、どれだけの割合を自行内金庫にある銀行券で支払うか、あるいは金で支払うかは銀行の裁量だし、また、預金の引き出しに充てるために自行が保有する有価証券をどれだけ換金するかもそうである。」（同第3238号）

ここでは、預金と銀行券と通貨（circulation）とが同じ範疇に属するものと認めさせたいヒュームに対して、オーヴァストーンは、銀行券は現実には存在する貨幣、預金は銀行券に対する請求権としてしか存在しないことを示そうとしたと言えよう。以上が24日までの質疑の概要である。

III. 問題への実証的接近 —— 7月31日の攻防 ——

最終日7月31日の質疑はすでに触れたように長大なものであり、また多数の論点を含んでいる。その中で次の質疑は一連の質疑の目的を明らかにしたもののように見える。

「私の目的は、イングランドが6,000,000クォーターの輸入穀物に支払いをしなければならなかった試練の1830～1832年においてイングランド銀行は商業にとって破滅的ないかなる危機をも伴うことなく通貨（currency）を維持することができたことを示すことである。有価証券保有をほぼ一定に維持するというこの準則がそれだけで多大なる困難の期間において実行可能であったなら、それはその後が続いた比較的平穏な時期においてはそれ以上に実行可能であったに違いないのではないか？——質問は1830～1832年の金流出期におけるイングランド銀行の安全は有価証券を一定に保つという準則に従ったことに明確に帰せられるのであって、地金流出に並行して通貨（circulation）を収縮させたという事実には帰せられ得ないと想定しているように見えるが、私はその想定を否定する。（以下略）」（証言第3499号）

これを見る限り、質疑はいわゆるパーマー・ルールの妥当性をめぐるものだったことになるだろう。そのことはこの委員会の報告によっても裏づけられるように見える。同委員会の設置目的は次のように述べら

れている。

「委員会は、イングランド銀行特許の最終更新以後における同行の業務管理の問題を解明するために（中略）、証言を吟味し、諸計算書（accounts）を要求した。」（House of Commons, 1840, p. iii.）

そして、そのうえで、次のように述べられている。

「イングランド銀行の業務管理について検討する中で、委員会の関心は必然的に1832年のイングランド銀行特許委員会での証言において述べられたかの原理に向けられることになった。この原理はホースリー・パーマー氏の証言において委員会に対して再度述べられた。」（*Ibid.*, p. iv.）

ここに言われる証言とはパーマーの証言第1142～1144号であり、それはパーマー・ルールを再言したもとのとして委員会報告にそのまま引用されている。

それ故、ここに見た限りにおいて、ヒュームの関心もまた委員会のそれに準じて同期間におけるイングランド銀行の金融政策にあったかに見え、同じく中でもパーマー・ルールを遵守する事の妥当性如何にあったかに見え、実際、同日の全150件中148件を占めるヒュームの質問中においてもパーマー・ルールへの言及は少なくなかったのであるが、しかし、この最終日質疑の全体を概観したとき、その大半がこの問題に傾けられたと言うことはできないだろう。前二日間の質疑内容から見ても、ヒュームの関心は依然として預金と貨幣との関係にあったに違いないと思われる。そのように見たとき、この最終日の攻防は前二日間の質疑とも整合してオーヴァーストーンとの対決の意義を明らかにするものになると思われるのである。

そこで、以下、この観点から質疑最終日の要点を概観すると、一連の質疑には冒頭から三つの攻防場面が現われ、それらは一部にパーマー・ルールの「実行可能性」問題を含みつつも、共通した論点としては一貫して預金と貨幣との関係の問題が争点として維持されていることがわかるだろう。

(a) 1830～1832年の諸指標をめぐる

最終日の質疑はヒュームが1830～1832年の指標を挙げながらパーマー・ルールの妥当性について問うことから始まっている。いくつかのやり取りのうえに次の質疑があった。

「イングランド銀行によって制定されたとされる準則とは有価証券保有高を一定に保つことおよび公衆に対しては彼らが思うであろうまに金請求によって通貨（currency）に作用を及ぼすことを容認することだと知っているか？——そうだと常に理解してきた。」（証言第3470号）

「そうだとすると、期間ごとの有価証券保有高に注意を払うべきことは通貨の額と諸機能に関する何らかの意見がその真偽を確かめられる以前に要求されるようになっているのではないのか？——

（前略）私の通貨（circulation）観によれば有価証券保有高を注視することは無用だ、何故なら私は有価証券保有高は通貨状態の適切な指標だとは理解していないからだ。」（同第3471号）

では、通貨（circulation）とは何か。オーヴァーストーンは明快に答えている。

「（前略）流通している銀行券（notes which are out）は、あなたの見解では、通貨流通高（circulation）の報告に含まれるものに限定されるのか？——（前略）通貨（circulation）とはイングランド銀行の壁の外側に出てしまった銀行券であるが、実際には、銀行業務の必要に応じるためにイングランド銀行の金庫に保管されている額もまた含まれる。」（証言第3481号）

だから、オーヴァーストーンにとって通貨（circulation）とは、つまるところ、イングランド銀行の発券済み銀行券のことであり、その一部は市中に存在する一方、残りの一部はイングランド銀行の準備金として同行内に留まっている銀行券そのものであるが、これらの後者が預金の支払い準備として預金残高に含まれている銀行券なのかそれともそれ以外の何かなのかは下に見るオーヴァーストーンの第3483号の証言も示すように判然としない。そして質疑は、この曖昧さを未解決にしたまま、この準備

表1 イングランド銀行勘定1830～1832年

(単位：ポンド)

	通貨流通高	預 金	負 債 計	有価証券保有高	地金保有高	資 産 計	剰 余 金
1830/2/27	20,050,730	10,763,150	30,813,880	24,204,390	9,171,000	33,375,390	2,561,500
1830/8/30	21,464,700	11,620,840	33,085,540	24,565,690	11,150,480	35,716,170	2,630,630
増 減	+1,413,970	+857,690	+2,271,660	+292,180	+1,979,480		
備 考				剰余金差額加算			

(House of Commons, 1840, pp. 319-20, 証言第3482号のヒュームの質問より作成)

金を含むであろう預金の運動の問題に入り込んでいく。次の証言第3282号の報告書1ページの大半を費やすほどの質疑はこの点にかかわる。第1表はそこでヒュームが挙げた指標を一つの表にまとめたものである。

ヒュームは上表1の数値に基づいて次のように質問した。

「(通貨)の増加は一部は流通通貨(circulation)に、一部は預金に起因するとは思わないか?(一部略)」(証言第3482号)

この問いは、それに対する証言においてオーヴァストーンも指摘しているように、同時期におけるイングランド銀行の金保有高の増加に照応して通貨流通に何が起こっていたかということである。具体的には、上表により、地金保有高が約1,970,000ポンド増加した一方で通貨流通高の増加は約1,400,000ポンドであったから、そこには約500,000ポンドの差があった。この差額の500,000ポンドはどう説明することができるかということである。

この問いに対するオーヴァストーンの回答は、これを要約すると、次のようなものであった。すなわち、同時期に預金が約850,000ポンド増加した一方で有価証券保有高が約300,000ポンド増加しているが、それは同時期における預金の増加分約850,000ポンド中の約300,000ポンドが有価証券投資に充てられたと見れば、その差額の約500,000ポンドはイングランド銀行の金庫(till)に残ったということであり、これが上記差額を説明するのである。と。そして、地金保有高約1,950,000ポンドの増加については通貨流通高

の増加分約1,400,000ポンドとここに見たイングランド銀行金庫における増加分約550,000ポンドの合計額がこれに照応する、とである。(証言第3482号)

ここにおいてオーヴァストーンがイングランド銀行の金庫に残ったとする約550,000ポンドの銀行券について、最後に次の質疑があった。

「あなたはイングランド銀行の金庫(till)における準備金(reserve)の増加があったと述べたが、その準備金の額を示すイングランド銀行による何らかの刊行物があるのか?——ない。これは発券業務と銀行業務との結合に起因する不都合な結果の一つなのだ。」(証言第3483号)

ここにおいて争点となった預金の増加分約550,000ポンドは、イングランド銀行が金購入にあたって払い出した同行銀行券が預金として還流したとすれば、それは現金として機能する銀行券であったろう。だが、それはイングランド銀行の預金残高の全体を表わすものだとは言えない。その限りで、ここでは預金の性質は全体としては解明されないままに終わり、したがって預金と貨幣との関係をめぐるヒュームとオーヴァストーンとの対決も決着を見るに至らなかったと言える。

(b) 1835～1836年の諸指標をめぐって

上に見た問題、すなわち1830年8月30日の時点におけるイングランド銀行預金総額11,620,840ポンド中の約550,000ポンドは同行金庫内に実在したイングランド銀行券だったのか否かの問題は、上に見た攻防の

文脈に即してこれを言い換えれば、イングランド銀行はその額に相当する地金と有価証券をどのようにして購入するに至ったのかということであった。

だがヒュームは、この問題について深追いすることをせず、新たな問題に移行した。いわゆる西インド公債問題である。英政府は1833年奴隷禁止法（3d and 4th of William IV., cap. 73）の成立を受け、西インド諸島の奴隷所有者らに「補償」⁷⁾をする必要から総額15,000,000ポンドに上る起債をすることとし（Clapham, 1966, Vol. II, p. 148, 邦訳II, 161ページ），1835年7月29日の大蔵省布告⁸⁾により、1835年8月3日⁹⁾を入札日とした。そして、その払い込みを1835年8月6日¹⁰⁾から翌1836年9月13日にかけて13回に分けて受け入れることとし、その第1回目すなわち8月6日期日分および第2回すなわち10月16日期日分がそれぞれ全体の10パーセントつまり各1,500,000ポンド、そして第3回すなわち11月13日期日分が1,125,000ポンドで全体の7.5パーセントであった¹¹⁾。

攻防は証言第3510号および第3511号でのヒュームの質問に始まったように見える。

「西インド公債の場合、その第一回および第二回の払い込みに関してイングランド銀行はどのようなことを行なったか知っているか？」（証言第3510号）

「払い込みは第一回が8月6日、第二回が10月16日、第三回が11月13日であったことは知っているか？」（同第3511号）

これらの質問のねらいは次の質問と重ね合わせて

みるとわかりやすいだろう。

「その公債に対してまだ1シリングも支払われる以前の8月5日にイングランド銀行は大蔵省証券、インド債、長期の為替手形およびその他の優良な有価証券を担保として貨幣を貸し付けるとの公告をしたこと、その数日後には株式を担保として貸し付けることにも同意するとしたこと、を知っているか？」（証言第3520号）

「イングランド銀行は融資の契約が成ったときには4パーセントで割引するということが、8月5日以降については2,000ポンド以上の額については3.5パーセントで貨幣貸付を提供するとしたことを、イングランド銀行の事情（fact）に親しんでいる銀行家として、知っていたか？」（同第3521号）¹²⁾

つまり、8月6日の西インド公債第1回払い込みに先んじて、また10月16日の第2回払い込みには2か月先んじて、まず同公債応募者に対してイングランド銀行自身が割引条件の意図的な緩和によって貨幣を融通したのだということである。だが、ヒュームのねらいはこのイングランド銀行の操作を批評することの外にあったように見える。上記証言に続く一連の質疑がその点にかかわるものである。ここではその点を第3525～3528号の質疑によって見ることにしよう。

「1835年8月25日以降において、イングランド銀行の有価証券保有高が26,964,000ポンドであったとき、同行は有価証券の購買を通じて漸次その発券を増加させていき、それは1836年1月12日に

7) この点については児島（2014, 2015）が詳しい。同（2015）では奴隷制の有償廃止に対して正しくも「加害者なのに被害者の顔」（47ページ）との指摘がなされている。

8) *The Circular to Bankers* (July 31, 1835), に掲載 (pp. 10-12)。

9) 布告は同年7月29日付で同日は水曜日、そして同布告には「次の月曜10時に入札を実施する」と記載されていることから、入札日は8月3日となる。

10) 布告には第2回以降の12回の払い込み期日が記載されているが、第1回分のみ期日の記載がない。ここでは証言第3511号においてヒュームが挙げた期日にしたがった。

11) 第4回以降の期日と金額および全体に占める比率は次のとおり。第4回12月11日が1,125,000ポンド（7.5パーセント）、1836年1月13日が1,500,000ポンド（10パーセント）、2月9日、3月11日および4月12日が各1,350,000ポンド（9パーセント）、5月10日が900,000ポンド（6パーセント）、6月14日が750,000ポンド（5パーセント）、7月12日が1,200,000ポンド（8パーセント）、8月16日が750,000ポンド（5パーセント）、9月13日が600,000ポンド（4パーセント）。上記 *The Circular to Bankers*, p. 11.

12) 4パーセントであった大蔵省証券等を対象とするイングランド銀行の割引率が同年8月5日以降は3.5パーセントとなり、8月20日からは株式も適用となった経過については拙稿（2013）42ページの表と表注参照。

は31,954,000ポンドに達したが、その間、発券は5,000,000ポンド増加したことは知っているか？——（前略）私が理解することは、1835年6月においてイングランド銀行の通貨流通高は18,300,000であり、1835年12月においてはそれは17,300,000ポンドで、それは1,000,000ポンドの減であった。何れにしても、通貨流通高が増大したという事実は聞いていない。」（証言第3525号）

「1835年8月～1836年8月にイングランド銀行はその銀行券発券を報告書において同行が購入したとされる5,000,000ポンドの有価証券に対するものとして増加させたか？——すでに述べたように、同期間において銀行券発券の増加はなかった。イングランド銀行は同期間に増えた預金を有価証券購入に充てたのである。」（同第3526号）

「イングランド銀行は、発券によるのでないとしたら、何でもって5,000,000ポンドの有価証券を買ったのか？——預金の増加によって手に入れた貨幣によってである。もちろん、そのために発券したと言うこともできるが、そのための増加発行ではない。」（同第3527号）

「有価証券の購入に支払われた銀行券の額についてだが、それはイングランド銀行券の増加発行ではないのか？——イングランド銀行は追加の有価証券を預金の増加によって流入してきた貨幣で購入したのである。（以下略）」（同第3528号）

第3510～3511号の証言においてヒュームが述べてもいるように初めの二回の払い込み金合計が3,000,000ポンドであり、それに第三回の分を加えると4,125,000ポンドであった。この資金の用意を可能にさせるため、イングランド銀行は、証言第3520、3521号の質問に見られるように、1835年8月5日を第二の画期とする金融緩和に進んだとすれば、このことはイングランド銀行券の新規発行を伴うものでなかった限り、同行金庫に保管されていた銀行券の公衆への払い出しを不可避としたはずである。その金額を、ヒュームは証言第3525号の質問において約5,000,000ポンドと見積もった。この金額は、それを手にした投資家たちがそれでもって西インド公債を購入しようとした基金であったとすれば、それらはその大半が西インドの旧奴隷所有者たちの手元に流れていったことだ

ろう。

この一連の過程の中での貨幣の動きについて、オーヴァストーンは証言第3526号において発券拡張はなかったと述べた。そして、続く証言第3528号において「追加の有価証券」についてはこれを「預金の増加によって流入してきた貨幣で購入した」と述べた。何故なら、証言第3525号において述べられたように通貨流通高は1,000,000ポンドの減だったからである。

この状況のもとで、公債への払い込みがすべてイングランド銀行券によって実行されるべきものであったとしたら、そしてその銀行券は上に見た緩和によって投資家たちに供給されるべきものだったとしたら、その銀行券はイングランド銀行の金庫の中にあった準備金の一部でなければならない。他方、払い込みが小切手等の信用諸用具によっても実行可であったすれば、そこに銀行券の出動を俟たない預金の活動の余地があったであろう。

だが、両者の間でこの点へのこれ以上の立ち入った質疑は見られなかった。とは言え、上記証言第3525号で言及された期間におけるイングランド銀行の勘定によってある程度の推量はできるだろう。次の表2は1840年発券銀行委員会に提出された附録第15号の関係部分の抜粋に対前期比増減を付したものである。

右表2において、証言第3525号の質問においてヒュームが言及した1835年8月25日～1836年1月12日の期間および同じくオーヴァストーンが言及した1835年6月～同年12月の期間に近い期日に着目すると、通貨流通高が全期間において安定していたとともに1835年12月29日に終わる四半期においては1,000,000ポンドの減少すら見られた一方、1835年9月29日および同年12月29日に終わる二つの連続した四半期において有価証券保有高は計6,036,000ポンドの、預金は計7,790,000ポンドの、各増加を示している。また、それ以降については、有価証券保有高は1835年3月29日に終わる四半期に3,332,000ポンドの減少を示し、以後は1835年6月30日に終わる四半期平均に対して3～400万ポンド上回る水準で安定している。預金もまたほぼ同じ経過で以前に比較して3～400万ポンド上回る水準で安定している。そして上に述べたように通貨流通高は全期間を通じてほぼ一定であった。それ故、上記証言3525号において言及された期間におけるイングランド銀行の取引は、その限りにおいては、主に預金

表2 イングランド銀行四半期毎勘定1835～1836年

(単位：ポンド)

	通貨流通高	(前期比増減)	預 金	(前期比増減)	有価証券保有高	(前期比増減)	地金保有高
1835/ 3/31	18,507,000		11,597,000		26,406,000		6,378,000
1835/ 6/30	18,315,000	(－ 192,000)	10,954,000	(－ 643,000)	25,678,000	(－ 728,000)	6,219,000
1835/ 9/29	18,216,000	(－ 99,000)	13,392,000	(+ 2,438,000)	28,081,000	(+ 2,403,000)	6,253,000
1835/12/29	17,208,000	(－1,008,000)	18,744,000	(+ 5,352,000)	31,714,000	(+ 3,633,000)	6,841,000
1836/ 3/29	17,985,000	(+ 777,000)	15,307,000	(－ 3,437,000)	28,392,000	(－ 3,332,000)	7,789,000
1836/ 6/28	17,899,000	(－ 86,000)	13,810,000	(－1,497,000)	27,153,000	(－1,239,000)	7,362,000
1836/ 9/27	18,136,000	(+ 237,000)	13,884,000	(－ 74,000)	29,296,000	(+ 2,143,000)	5,591,000
1836/12/27	17,305,000	(－ 831,000)	13,931,000	(+ 47,000)	29,668,000	(+ 372,000)	4,414,000

(House of Commons, 1840, p. 105, Appendix, No. 15 'AVERAGE QUARTERLY ACCOUNT of the LIABILITIES and ASSETS of the BANK of ENGLAND, at the under-mentioned Periods.' より作成)

を通じてなされていたということになり、証言第3526～3528号はそのことをオーヴァーストーンが認めた場面だったということになるだろう。だが、そうだったとしても、このことが預金が貨幣と同一だというヒュームの主張を完全に裏づけるものだったということまで

はできない。何故なら、これらはその時点での預金の一部の運動であつたに過ぎないからである。そこでこの争点の行方について今しばらく追跡してみることにしよう。

表3 イングランド銀行勘定1838～1839年

(単位：ポンド)

	通貨流通高	預 金	負 債 計	有価証券保有高	地金保有高	資 産 計	剰 余 金
1838/4/*	18,087,000	11,262,000	30,249,000	22,838,000	10,126,000	32,964,000	2,715,000
1839/9/17	17,960,000	7,781,000	25,741,000	25,936,000	2,816,000	28,752,000	3,011,000
増 減	－1,027,000	－ 3,481,000		+ 2,802,000	－7,310,000		
備 考				剰余金差額加算			

(House of Commons, 1840, pp. 330-1, 証言第3572号のヒュームの質問による)

* ヒュームの質問では日付の言及がない。

(c) 1838～1839年の諸指標をめぐって

ヒュームは次に証言第3572号の質問において1838～1839年の諸指標を取りあげる。

表3はその諸指標を一覧にしたものである。

これについてヒュームは次のように問いかけた。

「この事実から次のようにならないか、すなわち、地金の減少分7,310,000ポンドから通貨の減少分1,027,000ポンドを差し引くと地金6,238,000ポンドの減少分がなお説明を要するものとして残る、そしてこの6,238,000ポンドという金額から預金の減少分3,481,000ポンドを差し引くと地金の減少分2,802,000ポンドが依然として説明を要するものと

して残るが、それ（この減少分2,802,000ポンド——竹内）は有価証券保有高の増加分2,802,000ポンドに正確に一致する、つまり、それに対する発券分は最初に預金に向かい、それから地金の引き出しに充用されたのだ、と。だから（中略）、1838年4月～1839年9月の7,310,000ポンドに上る地金減少分については、1,027,000ポンドだけが通貨流通高からもたらされたに過ぎず、残余の6,238,000ポンドは預金を通じてもたらされたようには見えないか？」（証言第3572号）

これは要するに、同時期におけるイングランド銀行からの総計7,310,000ポンドに上る金流出は、そのうちの1,027,000ポンド分については市中で流通していた銀行券によるものであった一方、残余のうちの2,802,000ポンドについてはイングランド銀行による同額分の有価証券購入代金をその販売者が一旦同行に預金した分が今度は引き出されてイングランド銀行からの金購入に向けられたことによるものであり、その残余3,481,000ポンドについてはそれ以前からの預金引き出されて同じくイングランドからの金購入に向けられたことによるものだった、ということである。つまり、イングランド銀行からの金流出総計7,310,000ポンドの86パーセントにあたる6,283,000ポンドは預金によるものだった、ということである。

この問いかけに対するオーヴァストーンからの明確な回答はないように見える。その一方、証言第3575号および第3579号において次の質疑が見られた。

「イングランド銀行にとって地金が流通している銀行券によって引き出されるのかそれとも銀行の壁の内側において預金から取り出された銀行券によって引き出されるのかによる違いは何か？——銀行券が銀行に支払われることによって地金が銀行から引き出される場合、銀行の普通の務めは払い込まれた銀行券を破棄することである。また、地金が預金者の請求によって銀行から引き出される場合には銀行の務めはこの請求に対して有価証券を売却するとともにこの売却によって取得した

銀行券を廃棄することである。」（証言第3573号）¹³⁾

これに対してヒュームはさらにたたみかけ、最終的に、次の質疑となった。

「銀行券は払い込まれて廃棄されると言ったのではなかったか、そして、事の成り行きとして、イングランド銀行はそれらの有価証券保有者に対して銀行券で支払わなければならないということにはならないのか？——二つの説明があり得る。第一に、銀行券は廃棄され、その際、それらは通貨部（currency department）に払い込まれるのであるが、しかし、我々は銀行券は銀行業務の金庫（banking till）に払い込まれて有価証券買入のために再発行されるとの想定のもとに議論してきたのであった。だが、それらが廃棄されとした場合、そのことは単に次の追加的過程を来すだけのことである、すなわち、一部の銀行券が廃棄され、その代わりに別の銀行券が再発行されるのである。」（証言第3579号）

オーヴァーストーンの最後の証言は第3614号であったから、この証言の後にも質疑は続いた。しかし、この委員会における両者の攻防はここに見られる対立をもって終了したと見ていいだろう。ここにおいて、オーヴァーストーンは後に見られるイングランド銀行の発券部と銀行部とへの二部門分割を事実上すでに存在し機能しているものとして説明に供していると言えよう。他方、このオーヴァーストーンの説明をヒュームは詭弁と看做しただろう。ヒュームにとってそれらは預金の出入りを述べたものに過ぎなかったであろう。その故をもって、この時点で、ヒュームはオーヴァーストーンに対する内心の凱歌を愉しんでいたと思われるのである。

13) 「廃棄する」の原語は 'cancel' で、その意味は「再発行しない」ということである。証言第3560号におけるオーヴァーストーンの回答による。

IV. 結論と展望

1840年におけるヒュームとオーヴァーストーンとの攻防は、両者の直接の対決としては、概ね以上で終わりを告げた。それは一見すると最終的にヒュームが優位に立って終わったように見えるのであるが、ここでこの攻防の全容を振り返るならば、そこにはIIで見たオーヴァーストーンが最初に述べた論点すなわち預金と通貨あるいは貨幣との理論的区別の問題がIIIでは見られないことは直ちに気づくことである。つまり、オーヴァーストーンが冒頭の証言第3109号で指摘し、その後の証言においても指摘し続けた現金の出動を俟たない預金の作用について、ヒュームがこの論点を意図して回避したか否かは別として、ここでは実証的には全く不十分にしか議論されていないのである。その限りにおいて、預金と通貨との問題はここでは未解決だったということになるだろう。

オーヴァーストーンは、その後、先にも触れたように、同年中に *Morning Chronicle* 紙に一連の記事を寄せ、自らの立場の説明を試みた。オーヴァーストーンの通貨主義が何であったかは、これらの寄稿分とその一連の著作および同じく一連の委員会証言との全体によって明確にされるべきものであるが、なおそのうえにトレنزの通貨観との区別が明らかにされるならば、ここに通貨主義とは何かの問いへの答にもより近づくことができるだろう。これらの諸点の解明は残された課題である。

文献一覧

- House of Commons (1832), *Report from the Committee of Secrecy on the Bank of England Charter with Minutes of Evidence, Appendix, and Index*.
- House of Commons (1840), *Report from the Select Committee appointed to inquire into the effects produced on the Circulation of the Country by the various Banking Establishments issuing Notes payable on demand*.
- The Circular to Bankers*, No. 367, July 31, 1835.
- The London Gazette*, No. 21073, March 1, 1850.
- Morning Chronicle*, 16th Sept. 1840 (3), 3rd Oct 1840 (3e-g), 21st Oct 1840 (3b-d), 10th Nov. 1840 (3d-f) .
- Clapham, John (1966), *The Bank of England, a History*, Vol. II, 英国金融史研究会訳『イングランド銀行』II, ダイアモンド社, 1970年.
- Hume, Joseph (1839), *On the Bank of England; and the State of the*

- Currency*.
- McCulloch, J. R. (1846), *A Dictionary, Practical. Theoretical, and Historical of Commerce and Commercial Navigation*, New edition.
- Mortimer, Thomas (1823), *A General Dictionary of Commerce*, 3rd edition.
- O'Brien, D. P. (1970), *The Correspondence of Lord Overstone*, 3 vols.
- Overstone, Lord. (1837a), *Reflections suggested by a Perusal of Mr. J. Horsley Palmer's Pamphlet on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market*.
- (1837b), *Further Reflections on the State of the Currency and the Action of the Bank of England*.
- (1840a), *Remarks on the Management of the Circulation; and on the Condition and Conduct of the Bank of England and of the Country Issuers, during the year 1839*.
- (1840b), *A Letter to J. B. Smith, Esq. President of the Manchester Chamber of Commerce*.
- (1840c), *Effects of the Administration of the Bank of England. A Second Letter to J. B. Smith, Esq. President of the Manchester Chamber of Commerce*.
- (1840d), *Thoughts on the Separation of the Departments in the Bank of England*.
- Tooke, Thomas (1840), *A History of Prices, and of the Circulation, from 1838 and 1839, with Remarks on the Corn Laws, and on some of the Alterations proposed in our Banking System*, Vol. III, London. 藤塚知義訳, 『物価史』第3巻, 東洋経済新報社, 1980年.
- Torrens, Robert (1837a), *A Letter to The Right Honourable Lord Viscount Melbourne on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform*, 1st edition, London.
- (1837b), *A Letter to The Right Honourable Lord Viscount Melbourne on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform*, 2nd edition, London
- (1848), *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Bill of 1844 Explained, and Defended against the Objections of Tooke, Fullarton and Wilson*, London.
- (1857), *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Act of 1844 Explained, and Defended: Second Edition. With Additional Chapters on Money, The Gold Discoveries and International Exchange; and a Critical Examination of the Chapter "On the Regulation of a Convertible Paper Currency" in Mr. J. S. Mill's PRINCIPLES of POLITICAL ECONOMY*, London.
- 児島秀樹 (2014), 英領西インド植民地の奴隷制廃止と補償問題 (その1), 明星大学経済学研究紀要, Vol. 46, No. 1, 2.
- (2015), 英領西インド植民地の奴隷制廃止と補償問題 (その2), 明星大学経済学研究紀要, Vol. 47, No. 1.
- 竹内 洋 (2013), ヒュームの預金論とトゥック, 宮城教育大学紀要第48巻, 2013年3月.

(平成27年9月30日受理)